

平成二十七年夏の收穫 東急大古本市

土屋 博

文語日誌（平成二十七年八月二十四日）

今年も東急東横店澁谷大古本市の初日に赴く。購入したる書籍例年に比べ掘出し物多し。

一、「評註四書譯語」東京府士族美濃部繁榮編（明治十二年刊）二百圓也。凡例には「世般の小童是書を以て讀書中幾分の毗補をなせ」とあり。大學、中庸、論語、孟子の順に読み難き文字、意味の解り難き事項を解説す。

二、「評註山陽詩鈔 全」（明治十六年出版、浪華三書房藏、大阪府平民青木稿三郎發兌）五百圓也。卷の一冒頭は、偶作「十有三春秋逝者已如水」なり。

三、「百字文選」伊藤銀月著（如山堂、明治三十七年刊、定價二十五錢）千圓也。萬朝報への百字文投稿文秀作を纏めたるもの。たとへば、明治三十六年十二月廿七日第一回當選作品は、『彈丸雨飛の季節（一等賞） 京都骨皮生

歳の暮には寒暖計の水銀柱と同じく、人間も亦收縮の度を増すものだ。大闊歩が小走りおもあかりてほしに、大聲は細語に。手も足も出ず、首もやがて廻らなくなり、不倒翁おもあかりてほしよりもつと縮んで、仕舞には鐵砲玉となつて、大晦日をさして飛ぶ』

四、「蕪村俳句評釋」佐藤紅綠著（大學館、大正二年九版、定價二十錢、初版は明治三十七年）千圓也。緒言より、正岡子規翁曰く、句を作らんとすれば古人の句を讀むべしと。

五、「日本朱子學派之哲學 全」井上哲次郎著（富山房、昭和二十年九月刊、廿八版、定價拾七圓。初版は明治三十八年）五百圓也。井上哲次郎としては、「陽明學派之哲學」、「古學派之哲學」に次ぐ著作なり。井上氏曰く、朱子學は概して之を言へば、人をして溫良ならしめ、恭謙ならしめ、又篤實ならしむるものなり。簡短に之を言へば、人をして君子人たらしむるものなり。是れ朱子學は功利主義と全く相反し専ら人格完成を期するものなればなり、と。終戦直後かかる良心的の出版ありたること、戦後世代として傳統繼承の重要なことを改めて痛感する次第なり。

六、「偉人處世錄 正續二冊」藤井玄溟著（合資會社大日本家庭協會、大正六年刊）二冊にて千圓なり。東洋大學長大内青巒氏監修。正編は、忠君愛國より家庭家憲までの十八項目につき、金言、訓語、解説、實例を附す。

黒頭巾（横山健堂）による「大隈侯の讀書法」より。

『彼は漢籍の大綱に通じ、近代の著書、譯書の傑作を讀み若くは其の大要を知る。日々新しき書を讀みて怠らず。大隈侯は、新書を得て一讀し畢れば、また座右に置かず。古人の傳に博覽強記、一見の書を忘れずなどと記するものあり。大隈は此の如き人なるべし。』この種の本として出色、愛藏するに足る。

七、「波瀾立志 大臣」山口愛川著（内外出版協會、昭和三年刊、參圓五拾錢）二千圓也。明治十八年の第一次伊藤博文内閣より昭和二年の田中義一内閣まで入閣の百四五十名の人物の評傳を收む。千百八十頁の浩瀚なる書。

八、「現代名士逸話隨筆」増田義一著（實業之日本社、昭和十一年刊）三百圓也。たとへば、澁澤榮一は逝去の十二日前に、近親のものを枕頭に集め、陶淵明の歸去來の辭を低

聲にて全部暗誦して聞かせ、自分の心境は之を出ずと語られたる由。

九、「愛國詩文二千六百年」高須芳次郎著（非凡閣、昭和十七年刊、定價貳圓）千圓也。

落合直文「緋緘の鎧をつけて太刀佩きて 見ばやとぞおもふ山さくら花」の解説に曰く、『日本精神を美しく繪のやうに象徴したところにこの歌の生命がある。勇武と優美、この二つが調和した趣は、日本民族の上に見る一つの長所であり、傳統である』と。

十、「愛國詩歌」井上萬壽藏著（文化研究所、昭和十九年刊、定價三圓五十錢十特別行爲稅相當額二十錢）千圓也。口繪寫眞は藤田東湖「正氣の歌」と本居宣長の和歌「しきしまの」。構成は、和歌篇（御製、上古、中古、中世、近世）、漢詩篇（五言絶句以下種別）より成る。

吉田松陰の辭世より

『今我れ國の爲に死す、死して君親に背かず。悠々たり天地の事、感賞神明に在り』

十一、「歐米名著邦譯（明治）集」小田村寅二郎編（國民文化研究所、昭和四十五年刊）千圓也。「アメリカ獨立の檄文」を福澤諭吉譯して曰く、『右布告の趣旨は、余輩、天道の扶助を固く信じて、幸福と榮名を此一舉に期し、死を以て之を守るものなり』と。以下三十九篇ポアンカレ「科學と臆說」林鶴一譯にて終る。譯文の日本語感、今日とは異なり、漢語よく咀嚼せられ、齒切れよし。

十二、「定本河井繼之助」安藤英男著（白川書院、昭和五十二年刊）八百圓也。本書の結びに曰く、勝海舟は明哲保身、強大なる權力に逆らふことは無益と考へたるも、河井繼之助は義を重んじ損得を後にせり。その信ずる陽明學に悟達したるが故ならむ、と。なほ、著者安藤英男氏は頼山陽の民間研究家として有名なり。

（追記）古本市にて購入したる書籍に觸發せられ、ネットの「日本の古本屋」を通じて以下を購入す。

十三、「日本思想の系譜 上、中の一、中の二、下の一、下の二」（全五冊）小田村寅二郎編（國民文化協會、昭和四十二年―四十四年刊）千圓。新書版。前記十一の廣告にてその存在を初めて知る。文語百撰の先輩格として、日本思想史を鳥瞰し得る原文のアンソロジー、適切に蒐集せられ、何度も讀むに値す。地道なる作業に敬意を拂はざるべからず。荻生徂徠の箇所の解説を見るに、『井上哲次郎著日本古學派之哲學は今日尙最も有用なる參考書として推薦に値す』とあり。

十四、「日本古學派之哲學 全」井上哲次郎著（合資會社富山房發兌、明治三十五年刊、定價金壹圓六拾錢）八百圓也。前記五の姉妹版。井上によらば、伊藤仁齋は孟子を尊崇するに對し、荻生徂徠の道德上の見解は荀子に淵源する所多しとぞ。従つて人をしてトーマス・ホッブズの學說を連想せしむる由。

（平成二十七年九月十六日受附）